

ことのは一欠片

猫柳ハヤ

端末が繋がる音が脳に響く
入力装置で君の扉を叩くと

もう二人の距離は

ゼロ

全て架空の現実
君と僕の間にある

膨大な数のヒトが
二人の間に存在(い)たのに
僕と君は巡り逢った

そんな奇蹟は本当は何処にでも在り
一本づつ手繰り寄せた君への回線は
通信速度を上げていく

どんなに遠く離れていても
すぐ隣りで声がする
距離ゼロの絆

君からの両手いっぱいの情報は
言葉
画像
そして、熱量

電腦の海で
君へ辿り着けて良かった

彼(か)の人を造ろう
肌は白磁で
髪は鳶色の絹糸をよく梳いて
瞳は琥珀にしようか
鎖骨は左右対称に
指は長く
膝は丸く形よく
最後に薄紅をひこう
生きている証に

細い頤を上げ
喉の奥へ深く息を

彼の方は生きていく
そしてまた
彼の人を造ろう

僕は自動人形(オートマータ)
人間(ひと)を造る機械

彼の方は人間(ひと)
生きた人間(ひと)

君の視線が僕を避け始め、
僕ではなく、僕の後ろに向いた時。

それが。

何もかもが亡くなる合図(シグナル)。

この世に存在する全ての悪夢の内、
最悪なものを言葉に載せることの出来る僕だから。

安心して、

僕の息の根を、止めてください。

欠片の希望も見つけれないように、
精一杯の終わりを下さい。

僕の視線が君を捉えた時。

それが。

僕が亡くなる合図(シグナル)。

大好きな君
大好きな君
大好きな君

素敵な笑顔
素敵な笑顔
素敵な笑顔

君の笑顔が好きだから
どうしても欲しくて
我慢できなくて
細心の注意を払って
愛しい瞬間に
首を刎ねたのに

転がる君は笑っていない

大嫌いな君
大嫌いな君
大嫌いな君

君なんて

もう.....

僕は貴方を想い、
貴方は君を想い、
君は彼女を想い、
彼女は僕を想う。

誰もが、

先行し、
追い駆け、
行き違い、
遠離る。

不安を煽るだけの旋律。

終止線だけが重なる四重奏(クワルテット)。

黄色の闇が来る。

渦を巻く黒い雲を従えて、
宙(そら)が黄色に汚染されていく。

白い闇が来る。

黒い雲が敷き詰められていく天(そら)に、
白が滲み出てくる。

遠くに見える気圧の塊に、
冥(くら)い夜が浸食されていく。

石畳の小径の脇の線路に
路面電車が通り過ぎる
春の欠片を敷き詰めたような
庭先の露台(テラス)は
ほんのりと
ペリドットに染まってみえた

時は経ち
小さかったその背に届かなかった
林檎をもぐのは容易く
ぬるまった
ルビィ色の艶やかな表皮
を
湧き出でる泉で冷やす
彼の
横顔が
ただとても切なくて
恋情がこみ上げる

その容良い唇が
紡いだ言葉のひとつひとつを
眠りに堕ちても
失くしたりしたくない

楽園へ
向かう君は
俯かないで
往くはずだから
残される僕はせめて
重荷にならないように
唇の両端を上げて
柔らかく微笑もう
前だけを見る君には
決して伝わらないだろうけど

踏切をこ越えて
駅に立つ君の
手には冷えた林檎
朝の天(そら)は白く輝き
冴え冴えとした空気に
樹々が映える
行く手を見つめる彼の視線の強さに
眩暈がした

自らし思惟し
選んだひ『光』
求め続ける君の
背中をそっと見上げる
スノウドロップの僕

「しゃぼんだまが綺麗なのは、きっとすぐに壊れてしまうからだね。」

そう云った君の微笑みが、僕の穢れた軀(からだ)を浄化してゆく。

しゃぼんだま、ひとつ。

ぷつと弾けて、名残の欠片さえ遺さず失せる。

僕の視界が遮断され、光の欠片さえ遺さず失せた。

しゃぼんだま、ひとつ。

飛び立つ事も無く、未練の片鱗も見せず消える。

僕の手足が寸断され、希望の片翼も見せずに消えた。

しゃぼんだま、ひとつ。

上空を目指して、たったひとつで散って無くなる。

僕の心は凍結し、たったひとりで散って無くなった。

しゃぼんだま、ひとつ。

しゃぼ、ん、だま、ひと、つ。

しゃ……、だま、……と、つ。

し……、……ま、……。

……ま、……。

……。

僕は、ゆっくりと、確実に、着実に、明らかに、毀れゆく。

それでも君が僕の事を綺麗だと云ってくれるなら、

それでも僕は良いと思える。

果て

「其の果ての向こうには、何が在るの、」

「果ての向こうには何も無い。だから、『果て』なのさ。」

「果ての向こうには何も無い世界が有る、って事、」

「『何も無い世界』なんてものが存在するなら、其処は『果て』じゃあない。

『果ての向こう』などという概念が誤りなんだ。

『果て』より先は『時間』も『空間』も『想い』も何もかもから隔絶された究極の『無』でなければならない。

そして其の『無』すらも在ってはならない筈。」

「それじゃあ、」

「僕等の『脳』に『心』に『果ての向こう』という『言葉』がある限り、僕等は『果て』へ到達する事は無い。」

「僕等は進んで往けるんだね、一緒に。」

「ああ、永遠(ずっと)。」

そう云って踏み出した、僕等の足の下、自由。

短い夜
一瞬の花火
君と僕

光の後を追う音は
目に見える刻(とき)

二人の間の群青と
宵宮の堤燈の対照

合わす視線に絡まる感情が
はらはらと闇に融ける

刹那の夢
彩る天(そら)
右手と左手